

### 第3回 全国大学選抜染色作品展 受賞作品評

#### 【総評】

3回目を迎えた今回は、全国の染織専攻のある大学16校の教員から推薦された16名の作家が出品した。過去最多といわれるコロナ禍の広がりのもと、制作もままならない状況のなかで、質の高い作品が寄せられた。伝統的な技法に根ざしたものから、新しい独自の表現に挑むものまで意欲的な作品が集まり、それだけに審査も白熱した。受賞を逸したもののなかで受賞してもおかしくない作品が少なからず含まれているということは記しておきたい。

技法的には、型染め、手描き染、蠟染め、刷毛染め、エアブラシ、絞り、友禅染、ステンシル、ブループリント、ほぐし拵、さらに立体構成まで、実に多様性に富み、染色の領域の広がりを映し出している。自らの個性を活かしながら独自の表現を切り拓いていこうという真摯な姿勢は、出品作品それぞれから伝わってきた。

染色は、制約の美術工芸だといわれる。むしろ制約を持ち味とすることで染色ならではの表現が生み出されている。また素材としての布を支持体としてのみではなく、その特性を積極的に表現に取り込むことで染色作品をより魅力的なものにしている。今回、出品した若い作家たちが、さらに染色表現の新しい地平を築いてくれることを期待したい。

(佐藤能史／染織と生活社編集長)

#### 【最優秀賞】岡山県立大学 今田千裕「身に憶う」

抑えた色彩による、血管か神経細胞の脈絡を思わせる模様表現は、身体の内部に染み入ってくるかのような、これまでにない独特の感覚を喚起する。3層3連の薄布によるレイヤーという重層的な作品構成も、記憶の襲へと分け入っていくかの繊細な意識の表情を感じさせて効果的だ。蠟染めの作品であるが、あえて岩絵具という、染色においては異質な色料を用いることによって、きっぱりとした形態表現を実現していて、全体の構想力も完成度が高い。

(佐藤能史／染織と生活社編集長)

#### 【優秀賞】名古屋芸術大学 新木萌愛「ぐるぐる cosmos」

コスモスという花とその語源に着目し、9点組の多彩な絞り染に展開した。類型の羅列に陥りがちな主題を、花芯部の緻密な集中と放射状に広がる流麗な色彩のコントラストで見事に表現した。絵画とは異なる染色の魅力が、生命感あふれる妖艶さを湛えている。

(島敦彦／国立国際美術館館長)

#### 【奨励賞／京都新聞賞】京都精華大学 清水佑季「Garden」

一見、色の墨流しの作品かと思間違う作品。よく見るとそれは細かなロウ書きの曲線の集積であり、また大胆な筆によるロウの流れがあり、そして打ち付けられたロウの集積も見受けられる。染の基本である防染のロウ技術をいかに発揮し、大きな画面に作者の染行為の跡を見つけることができる。それは作者が愉悦にひたった楽しみみの庭（Garden）でもある。

(辻喜代治／フリーランスキュレーター)

**【奨励賞】** 沖縄県立芸術大学 根路銘まり「鼓動」

本作は、朽ち果てた巨樹の樹幹をモチーフに、赤い地に黒と白を基調とし、藍に緑が差し、白がほのかに赤味を帯びる様で死と再生の姿が、色彩のシンボリズムで見事に表出された傑作である。絶妙なニュアンスを湛える色面と闊達な描線に加えて、沖縄伝統の臙型により朽木の木肌に地紋として樹皮の細密表現が効果的に施され、生命の循環という深い死生観がミニマルな矩形の平面に結晶している。

(不動美里／姫路市立美術館館長)

**【奨励賞】** 京都芸術大学 長田綾美「floating ballast」

「絞り」に照準が当てられた本作は、染色の造形思考がインスタレーションによって大胆に提示されている。石などを布で包んで糸で絞る染色技法は各地にあるが、建築資材のバラス石と、コロナ禍によって生活に欠かせない布となった不織布を採用し、現代の生の在り様を象徴させ、石ころを布でくるんで宙吊りにする状況を構築。絞り染という表現行為が内包する現代性を洞察し、現代社会に拡張させた意欲作である。

(不動美里／姫路市立美術館館長)